

金曜日の会 報告

- 1 期日 2月5日
- 2 場所 倉敷労働会館
- 3 参加者 AR AK AS YO
- 4 内容

『開脚跳び』映像 AR

『世界一美しいぼくの村』解釈・展開 AS

『あとかくしの雪』解釈・展開 AK

○『開脚跳び』では、始めの『腰の位置を高くする』意識が、助走を始めるとなくなってしまふことが話題になりました。これをキープするために、膝を上げる助走がよいのか否か、結論には至りませんでした。つま先で床をはじくような踏み切りによって腰を上げることや、手のひらで跳び箱を強く突き放し体を起こす一連の動きの大切さを確認しました。また、踏み切り板を使わずに膝のバネを育てることは必要なことだと改めて感じました。更に、跳べない子どもの補助の仕方や練習のさせ方も考えさせられました。

○『世界一美しいぼくの村』では授業展開について考えました。全体としては、4段落と5段落から20段落につながるヤモの様子が、27段落で『大よろこび』と大きく変化していますが、これを子どもが捉えることは難しいように思います。また解釈に戻るのですが、27段落を中心と考えた時、子どもが突破する必要がある布石と相互の関係を考えないといけないと思いました。そして、それぞれにおいて問題作りをしながらある布石と他の布石との関係や中心との関係をみる検証作業が必要です。また、どうしてもおおざっぱで言葉に具体的につかなくなる傾向があるので、まずは27段落で問題を作ってみました。『世界一』の基準やなぜ『美しい』という言葉を選択したのかはすぐに解決できそうになかったので、まずは『バグマンはいいな。』の『いい』は何がいいのかを考え、その根拠が『とてもなつかしいにおい』にあると考えました。普通、『たった一日いなかっただけ』で『なつかしい(よい思い出)』とは言いません。しかもそれを『とても』感じるということは、その正反対の状況があったのでしょう。おそらくそれは、11段落にあると考えました。また、においは何のにおいなのか、村いっぱい広がる果物のにおい(⇔香り)なのかそれ以外なのか、村へ帰ってきた時に村人たちと『(だれも持っていない)こんなきれいな羊』の話がはずんだでしょうし、そこでヤモは町のバザールになかった人のにおいを懐かしく感じたのだと思います。そう考えると、11段落の『でも』『だれも』の追求は不可欠になります。また、これらと関係して父の意図も読んでいかなければなりません。核と布石との関係の解釈をていねいに行った上で、では始めの場面ではどの言葉にあたり、問題作りをする(細部にあたる)等の展開を考える必要があります。宮坂先生が残してくださった『バカバカしいほど、自分で発見したことを授業にしてみる。』という教えの重みを感じます。自分で仮説を立て、検証してい

く。私も、教わろうの前に『自分で考えてみる』が足りてないと思いました。今週はビデオをとって、少し記録してみます。文責 YO